フォンテーヌブロー宮殿と庭園

～ フォンテーヌブローの森を愛した印象派の画家
シスレーの町、モレ＝シュル＝ロワンを巡る ～

フォンテーヌブロー宮殿

前回の『フォンテーヌブローの森を描いたバルビゾン派の画家たち』でご紹介した「フォンテーヌブロー宮殿」は、美術館でもあります。ナポレオンが指揮を執ったことでも知られ、ナポレオンが栄華を誇った時代を偲ばせる調度品や装飾品などが展示されています。フランソワ１世やナポレオンといった中世から近世にかけての時代、その変遷とともに時の権力者たちの政治の舞台となった宮殿です。登録基準（ⅱ）、「ある期間または世界の文化圏内で重要な価値観の交流」が認められたのも頷けますね。そして最後に、印象派の画家たちもフォンテーヌブローの地に集まってきたことを述べました。

今回は、その続きです。

印象派の画家たちの制作地は、主に「イル＝ド＝フランス（Île-de-France）」と呼ばれるパリ郊外の町や村です。南はフォンテーヌブローの森周辺、北はルーアン辺りまでを指します。印象派の画家たちは、若かりし頃、よく油絵を描きにフォンテーヌブローの森周辺に行きました。その時期は 19 世紀半ばで、バルビゾン派が全盛を迎える頃です。印象派とバルビゾン派、両派の橋渡し役はジャン＝バティスト・カミーユ・コローやカミーユ・ピサロでしたが、殆ど交流はありませんでした。時代も場所も至近距離にありながら、交流があまりなかったのはもったいない話です。もし両派の結びつきがあったなら、お互いに影響し合って、また別の名画が誕生していたのかもしれませんね。

バルビゾン派はどちらかというと過去志向、印象派は未来志向です。題材や画風も異なります。バルビゾン派は田舎の牧歌的で抒情的な風景、農民の生活を好み、印象派は同じ風景でも都市の生活を描き出し、パリ発の鉄道やそこから延びていく線路など、新しい題材を積極的に取り入れています。オスマン男爵による「パリの大改造（1853 年頃～1870 年頃）」も両派の作風に影響していて、パリで過ごした時期も、概ね、前者は大改造以前、後者は大改造以降と分かれています。

印象派の中で、このフォンテーヌブローの地をこよなく愛し、終の棲家とした唯一の画家が、アルフレッド・シスレー（1839 年～1899 年）です。おおよそ印象派の画家の制作地は、フォンテーヌブローの森から始まり、パリへ、そしてセーヌ河沿いのパリ近郊の町や村へと、だんだん北上していったのに対して、シスレーは、パリから郊外へ、パリ東南部のセーヌ川支流のロワン川沿いを活動拠点としました。英国にも何度か訪れましたが、最終的にはこのロワン川のほとり「モレ＝シュル＝ロワン」に戻ってきました。
この「モレ＝シュル＝ロワン（Moret-sur-Loing）」こそ、シスレーが息を引き取るまで描き続けた町であり、彼に描かれたことで、後年、知られるようになりました。
モレ＝シュル＝ロワンは、フォンテーヌブロー宮殿から８km ほど南下した所に在ります。パリから列車で約１時間、「モレ＝ヴヌー＝レ＝サブロ（Moret-Veneux-les-Sablons）」という小さな駅から静かな町並みを歩くこと約 30 分、町の城門が見えてきます。モレ＝シュル＝ロワンに到着です。
城門からロワン川まで約 300m続くストリートが、この町の中心です。レストランや土産物屋が立ち並んではいますが、賑やかな通りでありません。横道に入ると、シスレーが描いた連作をもつノートル・ダム教会や、ゆかりのある場所を見つけることができます。シスレーは晩年の約 20 年間をこの町で過ごし、住んでいた家も残されています。

ロワン川からノートル・ダム教会を臨む

アルフレッド・シスレー

モレ＝シュル＝ロワンのロワン川一帯は、本当に長閑です。水の流れも穏やかで、その川のせせらぎは、日本にはない静けさです。ロワン川から町の象徴ノートル・ダム教会を遠くに眺める風景は、シスレーの代表作にもなっています。
シスレーの代表作として、どのような作品を思い浮かべますか？　もしかしたら、誰もが知っているような絵画は無いかもしれません。しいて挙げるならば、1876 年頃に制作された「ポールマルリーの洪水」を描いた２作品です。晴天の日と曇天の日に描かれた、一見、何気ない風景です。

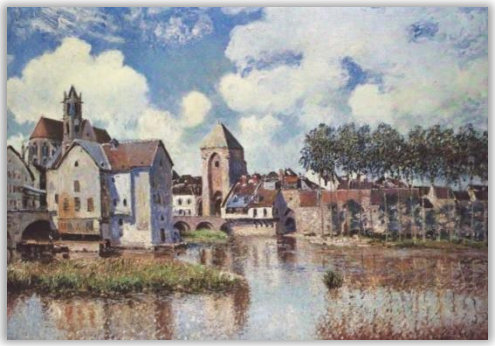
モンマルトル通りのシスレー終の棲家

では、なぜ知られるようになったかと言うと、題材が“普通ではない”からです。洪水という題名が書かれていなかったら、よくある水辺の風景に見えてしまうでしょう。ところが、題材のインパクトによって、鑑賞者の関心が作品に引き寄せられます。シスレーは洪水という災害を描いたにもかかわらず、穏やかな水辺の風景に仕上げています。ちなみに、描かれたこの建物は現存しています。

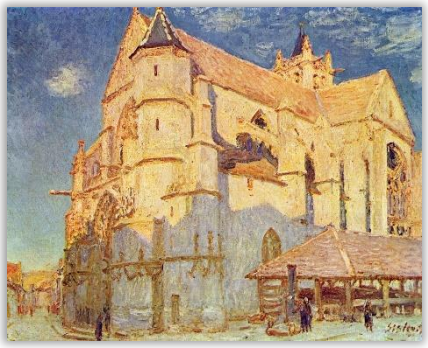
『ポールマルリーの洪水と小舟』
1876 年頃／オルセー美術館所蔵

『ポールマルリーの洪水』
1876 年頃／オルセー美術館所蔵

シスレー作品の特徴として、画面構成における空の占める面積が大きい、水辺の風景が多い、人物は画面の構成要素として取り入れるだけでメインに描かない、などが挙げられます。色彩は淡くて、強弱も柔らかい。原色をそのまま使わず、パレットの上で薄い色調に仕立てて塗っています。それが、シスレー絵画の魅力です。一般的に、原色をそのまま使うと、色が強すぎてペンキ塗り立てのような感じになってしまいます。そのような色彩を放つ実景は、通常はありません。シスレーは、この“色彩の本質”を理解していたのだと思います。これは同じ印象派のピサロやモネにも云えることです。「色を少し抑え気味に描く」ことが、若かりし画家たちの共通した特徴となっています。シスレー作品は良くも悪くも目立ちません。販売目的の作品でも、展覧会向けの作品でもありません。作品の多くは、見たまま、自然のままに描かれています。ここが他の印象派の画家たちと大きく異なる点です。落ち着いた色調、抑えた色合い……シスレーの絵画に対する信念は一貫していて、終生ぶれることはありませんでした。ぶれない（イコール）＝画家に必要なことだと思います。不遇のままこの世を去り、後世になって評価される画家は皆、信念を貫いた画家です。シスレーも、そのひとりと云えるでしょう。日本では、概して印象派の人気が高いですが、シスレーもたいへん人気があり、日本国内の美術館や個人などに 30 点以上が所蔵されています。シスレー作品を訪ねて美術館を巡ってみるのも、面白そうですね。



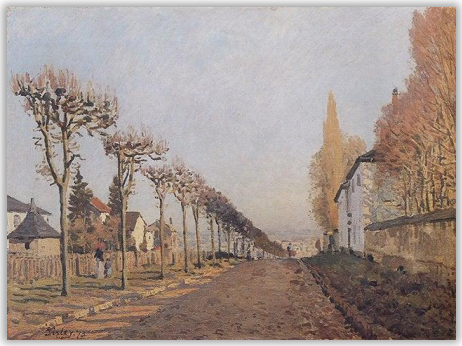
『モレ・シュル・ロワン』
1891 年頃／個人蔵



『朝の陽ざしを浴びるモレの教会』
1893 年頃／ヴィンタートゥール美術館所蔵

作品の特徴以外に、シスレーには特筆すべき点がもうひとつ、あります。それは、この町、モレ＝シュル＝ロワンを見つけたことです。つまり、“自分だけの町”、“自分だけの題材”を見つけたことです。モレの町を描き続けたことがシスレーの個性となり、100 年の時を経て、モレ＝シュル＝ロワンは知られるようになりました。“誰も知らない、自分だけの町”に巡り合えたことは、シスレーにとって幸せなことだったと思います。おそらく、この町を他の画家たち……誰にも教えたくなかったのではないかと推測します。その証拠に、彼以外の著名な画家たちは、モレ＝シュル＝ロワンを描いていません。シスレーは、ロワン川沿

いの別の町「サン＝マメス（Saint-Mammes）」や、パリの北西に在る「ルーヴシェンヌ（Louveciennes）」という町も、好んで描きました。気に入った町をとことん描くのも、シスレーの特徴です。



『ルーヴシェンヌの昼下がり』
1873 年頃／オルセー美術館所蔵

『サン＝マメスのロワン河畔』
1880 年代前半～中半／アイルランド国立美術館

モレ＝シュル＝ロワンの町を実際に歩いた私の感想は、とにかく長閑で清らかな感じのする印象でした。町の喧騒も無く、人が少なく、ロワン川の流れもゆったりとしています。橋の袂（たもと）のロワン川沿いは広々としていますが、町中は狭い所もあり、どこにでも見かけるありふれた“フランスの街並み”でした。油絵の題材としては、もう少しインパクトがあってもいいのかなと思いました。でも、とにかく心地良い町であることは間違いありません。シスレー作品とモレ＝シュル＝ロワンの町の印象が、ぴったりと一致するのです。彼がこの町を好んだ理由が分かったような気がしました。モレ＝シュル＝ロワンは、シスレーが出逢うべくして出逢った町。まさに、「シスレーの世界へようこそ」といった感じですね。

ロワン川沿い、ブルゴーニュ門とノートル・ダム教会

沼田政弘

●ちょこっとコラム

「グレ＝シュル＝ロワン（Grez-sur-Loing）」という村をご存じでしょうか。

モレ＝シュル＝ロワンと似た名称ですが、モレの町から西に５kmほど行くと在り、モレの隣のブロックという感覚。ここは、明治時代に浅井（あさい） 忠（ちゅう）や黒田（くろだ） 清輝（せいき）たちが過ごした村です。「ブロン＝マルロット＝グレ（Bourron-Marlotte-Grez）」という鄙（ひな）びた駅から、ひたすら歩きます。無人駅だったかもしれません。この駅から国道の１本道をまっすぐ歩くこと約３km。辺り一面、美しい牧草地が延々と続き、道中に店も民家も一軒もありません。十字路が見えてきたら、左折。遠くに民家が見えてきます。そしてまた歩くこと約２km、ようやく到着です。グレ＝シュル＝ロワンは全く観光地化されていない村で、100 年前の町並みがそのまま残っています。モレの町より、もっと田舎です。帰りは帰りで、また駅まで歩くので大変です。バルビゾン派、印象派、明治時代の日本人画家……フォンテーヌブローの森周辺は、画家たちにとっての聖地なのかもしれません。